

私の描く未来の酪農設計図

神奈川県立相原高等学校 畜産科学科 2年 畷田 里桜

今日生きている牛は幸せだろうか。今日酪農をしている人は幸せだろうか。今日牛乳を飲んでいる人の多くはきっとそれを知りません。それでいいのでしょうか。

中学1年生の秋、県内に畜産について学べる高校があることを母に教えられて知りました。私は非農家で、牛はおろか特別、幼い頃から動物と関わってきた思い出はありません。しかし、高校で動物と共に成長できることに大きな魅力を感じ、相原高校の畜産科学科に入学しました。毎日が驚きと感動の連続で、入学前に思い描いていた楽しい高校生活そのものでした。新しい体験を求めて畜産部牛プロジェクトの体験入部に参加し、初めての管理では給餌を行いました。自分のあげた餌を牛は長い舌を器用に使い、口いっぱい頬張ります。少し散らかしながら満足そうな顔を上げ、「おいしい!」と言わんばかりの瞳で私を見つめてきました。何てかわいいんだろう。この日から私は牛が大好きになりました。毎日のように牛舎へ向かい、大好きな牛の頬張る姿を見て帰る日々が続きました。

そんなある日、畜産の授業で「酪農家の離農数が増えている。」と学びました。飼料価格の高騰や光熱費、燃料費の高騰、それに伴う子牛価格の下落。2022年、この3つの大きな波が一気に酪農家を襲ったのです。もっと安い餌に変えたり、搾乳の回数を増やしたりするなどして利益を出そうとしても、約85%の酪農家は赤字だということです。大好きな牛と酪農家が危機的状況にあること、今飲んでいる牛乳が当たり前ではないということを痛感しました。学校での管理だけでは感じる事がなかった現代の酪農問題。このことについてもっと詳しく知りたい、地域の酪農家の実態を知りたいと思い、神奈川県のような酪農家で実習をさせていただくことにしました。

初めての実習先の伊藤牧場では堆肥化施設の見学をさせていただきました。そこには乾燥ハウスのとなりに野積みになっている堆肥があったのです。

「昔、この辺は農家がたくさんあって、堆肥が足りないくらい貰い手がいた。今はみんな高齢になって畑やめちゃったから堆肥が余っているんだよ。」と話して下さいました。堆肥も多量すぎると毒になり、悪臭や水質汚染など環境問題の原因となります。また、萩原牧場での実習では自給栽培飼料について勉強させていただきました。萩原さんは10aほどの畑を20ヵ所所有しており、毎年夏にデントコーンを栽培してサイレージにしています。神奈川県のような都市近郊地域では住宅街が多く、大きな畑を持つことは難しいためいくつかの畑をまわり、栽培、収穫を行わなければなりません。高齢の萩原さんにとってこれは大変な作業のため、今年から栽培量を減らしたとおっしゃっていました。栽培量を減らせば当然サイレージにできる量が減り、飼料費の負担が大きくなります。もともと赤字で、設備も新しくせずに壊れても自分たちで直してきました。このままでは赤字が増える一方です。

私は、これらの牧場実習から酪農の問題は酪農家だけでは解決できないこと、それぞれの酪農家自身の問題があることを知りました。そして、牛乳という飲み物はどのように生産されているのか、どれほどの苦労や問題を抱えているのか、毎日口にするほど身近なものなのに多くの非農家は何も知らないということを改めて実感しました。

私は、現代の酪農問題や地域の酪農家について知ることで、これらの問題を解決し、幸せな酪農経営を行える地域を作りたいと思うようになりました。高校生の今の私にできることはないのだろうか。

そこで、飼料価格の安定化を維持する経営を考えました。飼料費は経営費の約4割を占めているため打撃が大きく、すべての酪農家に共通する問題だからです。現在飼料価格が高騰している原因は、ロシアのウクライナ侵攻による穀物流通量の減少、中国やロシアの輸出規制、歴史的な円安などが挙げられます。これらはすべて国際情勢によるものです。つまり、国内で飼料を生産すれば飼料価格を安定させることができるはずですが、しかし、牧場実習で学んだように神奈川県には広い土地があまりなく住宅街が広がっている上、酪農家の高齢化が進んでおり、自給飼料の栽培はますます難しくなっています。住宅街が多くても、酪農家が飼料を生産できなくても、飼料自給率を上げることはできないのだろうか。考え抜いた末、私はひとつの答えにたどり着きました。「そうだ、地域みんなで飼料を生産すればいいんだ!」

地域で生産をする飼料は「四角豆」が最適だと考えます。四角豆とはツル性のマメ科植物で、緑のカーテンに利用する野菜として知られています。1年生の夏、授業でこの野菜を栽培したところ、病気や害虫の被害に合うことなく青々と大勢にツルと葉が伸び、熟せば大豆並みの栄養価がある莢をたくさん収穫することができました。緑のカーテンとして利用することでエアコンの使用量の削減や、堆肥の活用ができる上、小スペースでも大きく成長し栄養価、嗜好性ともに高い飼料が生産できます。そして、四角豆を食べた牛から生成される糞尿は堆肥となり、その堆肥は四角豆が成長するための栄養となり、再び牛の飼料となります。このような資源の循環も生み出し、地域全体で環境問題の改善に取り組むことができます。また、この活動を行うことで酪農や牛について知り、より身近に感じることができるはずです。

この夢を現実にするため、まず私は学校の放牧場の外側に四角豆を含めたたくさんのツル性の植物を定植しました。四角豆とほかのツル性の植物を比較すると生育スピードや葉の密度、栽培難易度において四角豆が一番優れているという結果になりました。10月になったら植物を刈り取り、乾草やサイレージにすることで、生産量、栄養価、嗜好性の比較を行う予定です。また、地域みんなで飼料を生産するという目標を叶えるため、近隣の二本松小学校と協力し、四角豆を栽培しています。刈り取った四角豆で子どもたちと一緒にサイレージ作りを行い、牛や酪農について分かりやすく伝える授業作りを計画しています。1年目の今年は、土作りや発芽率、牛に食べられない対策などに課題がありました。ですが、私の活動はまだ始まったばかりです。来年はさらに地域へ向けて規模を拡大していくことができるよう研究を進めていきます。

将来は農業系の大学で学ぶことでこの活動をさらに深め、現在の酪農の諸問題を改善する

だけでなく、私が飼料の生産者と消費者、牛乳の生産者と消費者を繋ぐバトンとなり、地域のみんなで幸せな酪農経営を行う。そんな未来を築いていきたいです。

10年後、牛と酪農家が幸せでありますように。その幸せを地域が支えていますように。そんなことを願いながら、今日も私は牛舎へ行きます。